



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	物体/事柄受容の汎用モデルの構築：文学受容の研究の基礎的考察
Author(s)	石原，次郎
Citation	北海道大学文学研究科紀要，102，15-59
Issue Date	2000-12-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33985
Type	departmental bulletin paper
File Information	102_PL15-59.pdf



物体／事柄受容の汎用モデルの構築

—— 文学受容の研究の基礎的考察 ——

石 原 次 郎

目 次

- I. 問題の所在
 - I-1. 問題の具体的な呈示(1)
 - I-2. 問題の具体的な呈示(2)
- II. 理論的な枠組みの検証
 - II-1. ソルソの美術知覚／認知理論の検証と批判
 - II-2. 石澤誠一氏の人間存在／言語論の検証と批判
 - II-2-1. フロイト
 - II-2-2. ソシュール
 - II-3. 感情
- III. 仮説モデル
 - III-1. 汎用モデル 1
 - III-2. 汎用モデル 2
- IV. 文学の受容
- V. おわりに

I. 問題の所在

言語を読み、また聞くという行為は、視覚あるいは聴覚をその最初の受容器官とする点で、その他の感覚的な知覚と最初はじつは変わるところがない。しかし、特に私が携わっている文学研究の分野では、驚くべきことに、この

単純な事実がひとつの研究領域を形成してはこなかったし、したがって、いまだにさしたる問題とも思われていないふしがある。

文学にかぎらず、いわゆるテキストをその対象資料としている研究分野では、研究者は、いったいそのテキストに〈ほんとうは〉なにが書かれているのか、に関心が向けられがちなのが現状だろう。言語の受容が、ほかの受容、たとえば夕焼けの空を見るといったこととはちがった、なにか特権的な、人間の〈知性〉にだけ関わっている行為として聖域化されているようだ。

だが、言語の受容は、ほかのすべての受容行為と同様に、視覚あるいは聴覚という感覚的な受容器官を用いるもので、したがって言語の受容も、当然この感覚的な受容にともなう感覚や感情をひき起こしているのは当然である。この事実を飛び越えて、ひたすらにテキストの〈真意〉を求める、あるいはそれを求めことに絶望するディスクールを展開するタイプの文学の諸研究は、私にはその足元が崩れ去っているように思える。

ほとんどの文学研究者が、あるいは一般に、言語を研究対象としてる者が、おしなべて等閑視していると思われる問題、つまり、どうして文学は、不安定で多様な読みを可能にするのか、どうしてある種の、とはいえけっして少ないとは言えない文学テキストは、多様どころか〈不可解〉ですらある文章を読者に突きつけてくるのか、どうしてある読者は、その〈不可解〉さをものともせず、たとえば感情のレベルでその文学テキストを受け入れることができるのか、たとえばどうして文体研究は、分類学以上の貢献を行なうことができないでいるのか、そもそもどうして文学研究は、いまだに安定した研究のパラダイムを獲得するにいたっていないのか……。これらの諸問題に答えるためには、私には、言語の感覚／感情的な受容のプロセスに着目する必要があると思われる。このプロセスを辛抱強く観察して、言語の受容の際にいったいなにが起きているのか、また、まさにそこで起きていることが、言語の受容を、一般に私たちが抱いているのかもしれない啓蒙主義的な願望とはちがって、きわめて多様で錯綜したものになっているのではないか、といったこと、過去の学術的な伝統の呪縛を逃れれば当然考察の対象になってよいはずのこうした問いかけが、私が本論で掲げて、解決を望む問題である。そ

のために、この小論で私は、言語もふくめた知覚対象の受容に関する既存の理論をいくつか検証したうえで、対象の受容に関する汎用モデルを構築して、来るべき文学研究の諸分野の基礎となる仮説を示し、そこを出発点として、文学が突きつけてくる多彩な問題圏を研究するためのひとつの糸口を提案したい。

I－1．問題の具体的な呈示(1)

前節で私が述べた問題を具体的なかたちで呈示してみよう。

教室で、学生に八木重吉 (1898－1927) の詩「あめの 日」¹⁾を見せて、各自に自由な印象を述べてもらったことがある。

しろい きのこ
きいろい きのこ

あめの 日
しずかな 日

文学に親しんだ者にとっては、〈単純〉な詩だろう。私には、静かに雨が降る薄暗い庭に、妙に明るく、しらじらしく、きのこが浮かび上がっている様子を、これまたしんと静まりかえった座敷から眺める病身の重吉の姿が浮かぶように思える。実際、そのような印象に近い感想を持った学生もいることはいたのだが、〈訓練されていない〉学生が多かったせいか、こうした、いわば〈妥当な〉印象を抱いた学生は、しかし少数に留まった。これほどに〈単純〉なテキストなのに、むしろ、私が予測したように、印象は多種多様なものになった。イメージすら湧かずに詩と自分とが無縁であると宣言する学生もいた。わざわざひらがなを多用する技巧性に、嫌みを覚える学生もいた。もっと私を驚かせたのは、予測しなかった〈誤読〉をした学生がいたことである。

うちひとりとは、3行めの「あめ」を「飴」ととらえていた。棒の先についた飴玉を、楽しそうに眺めている子供の姿。たしかにそうも読めるではない

か。

もうひとりの読みは、さらに私の予測を劇的に逸脱するものだった。しろいきのこ、核爆弾の雲、きいろいきのこ、発熱するキノコ雲、あめの日、死の灰の黒い雨が降る、しずかな日、あたりの生命はふいに途絶えて、死の静寂が訪れる……たしかに、この詩を書いたころの重吉は、広島と長崎の悲劇を知るよしもない。にもかかわらず、たしかにこの詩はそうとも読めるではないか！ アナクロニズムの批難をじゅうぶん承知のうえで、それでもなお、こう読める可能性を100%排除できるだろうか。

このふたりは、重吉の詩を〈誤読〉したのだろうか？ 重吉の詩に親しんだ者、重吉の生活史を知っている者、重吉の詩をそうした情報を踏まえて〈解釈〉しようとする者（その中には私も含まれる）ならば、このふたつの見解を〈極めて妥当性が低い〉ものとして判断するかもしれない。しかし、〈妥当性〉とは、こんなに短く、単純に見えて、参照できる情報量にもあまりにも乏しいテキストを前にした時、そしてその印象がかくもバラバラな時には、なにを意味するのだろうか？

〈妥当性〉がさほど妥当ではないのなら、〈誤読〉など問題になりようはずもない。たしかに、〈あらゆるテキストは、つねに誤読される〉。〈誤読〉は読者の権利であるばかりか、読みの日常と言ってもよい。しかしそこからまた、間テキスト性、生成するテキストといった内観的な思索に分け入っていくよりもずっと前に、やるべきことがある。まして、「読解不可能性 unreadability」²⁾を大げさに主張して、文学の評価基準に祭りあげてしまうよりももっとずっと前に、やるべきことがある。読みの現場になんとしても立ち会う必要がある。その現場で起きていることを、できるだけ誠実に観察して記述する必要がある。生理学や認知心理学の知見に学ぶ必要がある。内観法は役に立たない。その内観法に、長らく文学研究は頼りきってきた。文学研究は、読みを問題にしながらも、その実、現場に留まることはなかったのだ。

I-2. 問題の具体的な呈示(2)

同じ詩を使って、さらにふたつめの実験も教室で試みた。それは、原詩の表記を変えてみる、という、これまた単純な実験だった。教室では、オリジナルのほかに4つのヴァージョンを示したが、ここでは紙面の関係上、そのうちの2例を呈示するにとどめる。

最初のヴァージョンは、詩に特有ともいえる改行をすべてなくして、1行で表記したものである。

しろい きのこ きいろい きのこ あめの 日 しずかな 日

学生たちの反応は、私が予想したとおりに劇的なものだった。ある学生は、その「読みにくさ」に当惑した。別の学生は、とりわけ「きいろい」という形容詞が、構文的な拘束を乗り越えて、右と左双方の「きのこ」にかかっているように見えてしかたがない、と言った。もちろん、これは読み方規則の違反でもなく、〈誤読〉でもない。まさにこれが、そう読んでいる学生の読みの現場なのだ。

さらにこの実験で、多くのことを私たちは確認した。

- 1-1. 表記を変えることで、オリジナルが「詩」というジャンルであることがやすやすと再確認される。つまり、読み手は「詩」というスキーマを、この詩が呈示された瞬間に、ほとんど自動的に適用している。
- 1-2. 詩は、「詩」のスキーマを発動させるという認知心理学的なメカニズムで、その読解を容易なものとしている。このスキーマを持っていない読み手は、当然別様の反応を示すことが予想できる。
- 2-1. 改行の有る無しは、読み手の視覚的な情報処理に明らかに影響を及ぼしている。1行で書かれたヴァージョンは、明らかに「読まずらい」。
- 2-2. テキストは、ある範囲を持ってブロックとして知覚されている。

- 3-1. オリジナルの場合、1行ごとに読みが「止まる」。詩にある1字分の空白もまた、読みを滞らせる働きがあることが確認される。
- 3-2. 詩に現れる改行、あるいは空白の挿入というテクニックは、読書の時間を制御しているという観点からの、心理学的な考察が可能であるし、また必要である。

ふたつめのヴァージョンは、漢字表記の可能な部分を、すべて漢字で表したものである。

白い 茸
黄色い 茸
雨の 日
静かな 日

ここでもまた、学生たちの反応は多様をきわめるものだった。さしあたり、私が重要と考える点は、次のとおりである。

1. 漢字表記によるヴァージョンは、オリジナルよりも「かたい」感じがする。
2. この印象の原因は、学生が指摘したように、曲線による構成が多いひらがなに比べて、直線による構成が多い漢字が、視覚的に「かたい」ものとして感知されるところにあるとも考えられる。文字の視覚的な知覚に関する研究が必要である。
3. さらに、ひらがなの「やわらかさ」は、その表記から受ける「子供っぽい」印象とも関係している。これは明らかに、義務教育で日本語を習得する者にとって、ひらがなの学習が「子供」時代に行なわれるという、長期記憶のスキーマとの参照によってひき起こされていると考えられる。
4. 加えて、あえて成人がひらがな表記を多用する場合、それにとまな

て表記者の「子供」性を表現したいという欲求を垣間見ることができることから、表記者の潜在／顕在的な心理、表記と社会性との関係といった問題圏も開けてくる。

かくも〈単純〉な詩の、かくも単純な実験からだけでも、このように多様な研究対象が見えてくるというのに、どうして文学研究者はそれを無視しつづけることができたのだろうか。

上に呈示した各所見の詳細な検討は、のちの論文で行なうこととしたいが、この小論でぜひとも扱わなければならないのは、こうした諸問題の根にあると思われる基本的な事態、つまり、まさにいまここで読みの現場で起きている事態を、生理学、認知心理学、その他の信頼度の高いデータを援用しながら、より精密にとらえること、そうして学術的な批判に耐えうる文学研究の基礎的な理論を構築し始めることである。何度もくり返すが、こうした研究は、まだ始まってすらいないのが現状だ。

II. 理論的な枠組みの検証

考察に値する研究分野は、神経生理学(視覚、聴覚に関する末梢系の研究)、神経学と大脳生理学(末梢系の情報の中枢系による処理)、分子生物学(内分泌系、体内環境が感覚／感情、知的判断に与える影響の研究)、大脳研究の手がまだ及ばない意識の分野に関する精神分析の示す理論モデル、認知のスキーマの形成に関する発達心理学的、あるいは社会学的な研究など、枚挙にいとまがないほどである。私はいつか、こうした諸分野の有効性をひとつひとつ検証していくつもりだが、その途方もない、しかし確実に実りのある作業の最初の糸口として、本論では特に、視覚芸術に関するソルソの認知心理学的な作業と、ソシュールとフロイト／ラカンを基盤的な考察対象とした石澤誠一氏の研究に的をしぼって、検討を加えたい。

II-1. ソルソの美術知覚／認知理論の検証と批判

視覚芸術に関して、認知心理学のデータを最大限に利用しながら、網羅的に論じた最近の著作は、最近ではソルソ³⁾をおいて他にはない。もちろんソルソは、私がテーマとしている文学ではなく、絵画をその対象としてはいるが、まず、文学に関する認知心理学的な包括的研究がいまだに存在していない点、そして、それにもかかわらず、ソルソの呈示する理論モデルは、文学の研究に大きく貢献できる点から、これを検証してみたい。

網膜の興奮から大腦による高度の情報処理にいたる絵画の知覚／認知に関するソルソの見解は、ソルソ自身による図⁴⁾を若干修正するかたちで、図1のモデルで略示できる。

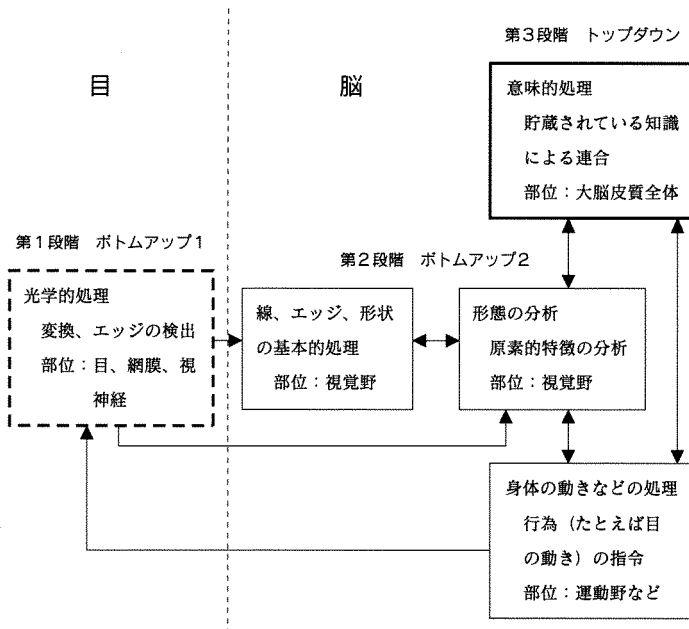


図1：美術の知覚／認知の相互作用モデル

美術の知覚／認知に関するこのソルソの包括的なモデルは、不思議なことに

色彩の知覚に関する部分を完全に欠いているが、それでもソルソは、美術の認知に際して、ボトムアップ的に目と視覚野での視覚的な情報処理が作用していること、そして大脳での〈意味的处理〉のレベルが、この視覚的な情報処理にトップダウン的にフィードバックをかけて影響を及ぼしていることをよく示している。

認知心理学に親しんだ研究者にとっては当たり前とも思えるモデルだが、こと美術の知覚／認知に関しては、このモデルは重要な情報を含んでいる。

1. 光学的処理の段階（ボトムアップ1）では、絵は、人間の持っている生理学的な諸条件によってとらえられる。つまり、絵は決して〈そのもの〉としてキャッチされているわけではない。
2. さらに、この、〈そのもの〉としての絵からは（恐らくかなり）ずれた光学的神経情報は、ボトムアップ2の段階で、さらに人間の知覚に固有の変形を受ける。
3. 意味的处理の段階（トップダウン）では、ある個人が所有する知識の貯蔵庫（スキーマの集合体）が参照されるために、ここでさらに絵は、それを見ている個人によって特有の加工を受ける。
4. 各段階、特にボトムアップ2とトップダウンが相互に作用しあうために、ボトムアップによって脳に持ちこまれる情報の一部が、不必要なものとして、最終的には処理されずに脱落する可能性がある。
5. さらにこの相互作用のために、意味的处理の段階では、絵とは直接関係のないなにかが、しかも大量に加えられる可能性がある。

つまり、絵画の知覚／認知は、そのどの段階でも、つねに変形と加工、脱落と書き込みを行なっているわけである。「美術作品の知覚には、……だれにでも共通する生理とその人特有の心理とが関係している。」⁵⁾ 同じ絵画を見ているものどうしは、おそらく高い確率で、お互いに同じ絵画を見ていると言いあえるが、各個人がそこになにを見、なにを感じ、なにを思っているかは、到底一致するものではない。当然ソルソもこのことを指摘している。

「もしあなたが友人と美術館めぐりをしたことがあれば、美術作品の解釈が互いに大きくくい違うということを経験しているだろう。(中略)私たちはそれぞれ、世界に関する情報の膨大な記憶をもっている。高次の知覚は、その人間の過去の経験や知識(個人的な「大脳百科事典」ともいえるもの)によって決定されるので、モナ・リザの微笑みに対するあなたの見方は、おそらく私の見方とは異なるはずである。」⁶⁾

しかし、私の期待を裏切って、ソルソは、(アメリカの理論家によく見られる、また、一般に認知心理学者や大脳生理学者にもしばしば認められる傾向だが) 絵画の受容の多様性へと論を運ぼうとはしない。むしろその逆で、多様性のなかでの(たとえ蓋然的であれ)一般的な法則性を記述し始めるのである。

その傾向は、遠近法で美術の歴史を概観しようという態度⁷⁾にまずはっきりと現れる。遠近法という技術は、あくまでも絵画の構成に関するものであり、それはもっぱらトップダウンレベルに関わる。したがって、そこになんらかの一般則を見い出して記述しようというのは、その誘惑は果てしなく大きいですが、そこには、教育的な意図以外のものは感じられるものではない。

またソルソは、マグリットの『複製禁止』(図2)を例にして、認知的不共和の問題を論じている。

おそらくあなたの最初の反応は、私と似たものかもしれない。「この男の『顔』は鏡に映るはずじゃないか。」(あるいは、「後ろ側が正しく映っているなら、顔はこっちを向いているはずじゃないか。」) この絵には根本的に「おかしい」ところがあり、物理的法則が突如停止してしまう。この絵を見る「と、目にしている」ものが、世界に関する知識の一部である「鏡のスキーマ」と矛盾するという意味で、一種の視覚的不調和が生じるのである。⁸⁾

ソルソはこの〈認知的不共和〉に対する、3つの一般的な解決法を示している。

1. この絵は下らないとして却下する
2. この絵に、描かれていること以上

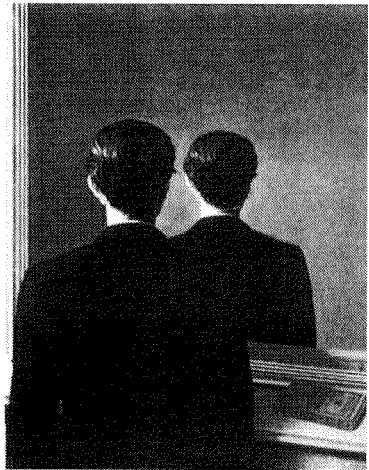


図2：マグリット『複製禁止』

の象徴的な意味を与える

3. この絵に正しい鏡像を書き込んで修正する⁹⁾

ソルソのこの着眼にはじつは盲点がある。マグリットの絵に、なんの〈認知的不共和〉も覚えないケースがあるのだ。ソルソが鏡だと思いこんでいる部分を、ビデオモニターか、あるいは別の絵だと考えてみたらどうか。即座にマグリットの絵は単なる写実画になりおおせるのである。私には、さしてすごいとも思われなかつとちを用いた画家、マグリットに、えいやつととんちで応酬しちゃうのである。牽強付会でもこじつけでもなんでもない。マグリットの絵に〈認知的不共和〉を覚える者には、じつはすでに「マグリットは〈認知的不共和〉をとおしてなにかを象徴的に表現した画家だ」というスキーマが働いているのである。このスキーマを所有しない、あるいは共有する気がない者にとっては、〈認知的不共和〉は存在しないに等しい可能性がある。

ここにトップダウンレベルを扱う際のやっかいさがある。遠近法にせよ、〈認知的不共和〉にせよ、トップダウンを扱う場合には、その研究者自身の経験的な知識内容まで、先入見としてトップダウン的に関わってきてしまうことは避けられない。したがってその分析は、つねに反証を受けざるをえないのだ。

ソルソの先入見は、残念なことにいたるところで顔を出す。それは抽象美術の解説で明らかになるし¹⁰⁾、「作品がいかにあいまいであっても、それぞれには必ず中心的なテーマがある」¹¹⁾という、それ自体がなんともあいまいな言明となって現れる。

ソルソの先入見は、つぎの主張で頂点に達する。

美的表現（音楽、文学、科学にもあてはまるが）の……構造の中には、さらに第3のレベルがある。すべてのレベルは不可欠で、相互に作用しあうのだが、中でも第3のレベルはもっとも重要である。このレベルを、ここでは簡単に「レベル3」と呼んでおこう。このレベルでは、対象、音、あるいは考えの特徴的・意味的解釈だけでなく、さらにそれ以上のことがわかる。レベル3での理解は、特徴の知覚やそれらが意味するものをはるかに越える。多くの場合、美術のレベル3の解釈は、特徴的・意味的知覚には周辺的にしか関係していない。それは、絵が意味することを越えさえる。カンディンスキーの『コサック兵』は、線、色、コントラストなどの特徴からなる。私

たちにはみな、それが見える。次のレベルでは、これらの線の何本かが戦っているコサック兵を表わしているという意味を理解する。ほとんどの人は、この絵がなにを暗示しているかが「わかる」。レベル3での理解は、認知だけでなく、さらに感情がともなう。それは絵のタオであり、(老子のいう)真のタオのように「いい表わすことのできないものである」。同時に、それは、絵のもっとも直接的な意味であり、絵のもっとも漠としたものである。それは、絵と「一体化」することで絵あり、絵を心の普遍的な特性と混ぜあわせることであり、絵の中に自らの根源的な心を見ることである。¹²⁾

どうしちゃったんだソルソである。彼の言う〈レベル3〉の存在は、ある絵画に魅了された経験をもつ者なら、その〈タオ〉の主張はいただけないにしても、ありそうな感じがする。しかし、ここまで踏みこんでしまっただけは、学術的な妥当性は微塵もない。とはいえ、私はここに認知心理学者の切なさ、あるいは現在の研究者に共通する切なさは見てとることができる。それは、感情を扱う際の異常な困難さである。感情は、いかにその研究が困難であっても、ソルソのようにそれを先入見以外のなにものでもない形而上学の天空に放りあげてしまうわけにはいかない。どんなに困難であっても、感情とわれわれがとらえるカテゴリーにも、だれにでも共通するメカニズムと、個々人に固有の働きとが絡みあっているはずである。たしかに現状では、感情に関する納得のいく理論はいまだに存在していない。しかし、芸術の受容に際して、感情がもっとも重要な要素として関わっているということは、だれにも否定できない。いまだに明確には理論化されていない感情を、現段階では少なくとも空白のブラックボックスとして取りこんだ理論モデルを、私はこの小論でのちに呈示したい。

さて、ソルソの示す絵画に関する知覚／認知のモデルは、言語の受容のモデルに応用できる。言語の受容はもっぱら知的な認知にだけ関わる、という性懲りもない先入見を離れれば、大脳のなかの受容野として、まずはもうひとつ、言語を処理する部分、言語野を加えればよい。書かれた言語は、まずもって視覚によってとらえられる。そして、いかに知覚対象が言語であっても、視覚的処理は確実になされている。さきに実例で示したように、たとえば改行、空白といったテクニック、あるいはまた、ひらがな、かたかな、漢

字による表記は、まず視覚がこれをとらえて、当然処理している。それは、表記法のことになったテキストが、ちがった読みを喚起しようという事実から明らかである。さらに私は、これに感情の要因も加えておかねばならない。表記の差は、読み方のみならず、テキストの感情的な印象にまで影響を与えるのである。¹³⁾

II-2. 石澤誠一氏の人間存在／言語論の検証と批判

石澤氏の『翻訳としての人間』¹⁴⁾は、フロイト＝ラカン精神分析の思考法を基軸としながら、ソシュール、ニーチェ、ハイデガーの言語思想にまでその考察を及ぼせた、人間と言語の関係を鋭く論じたきわめて重要な研究である。この重厚な研究の全体を見渡すことは、私の能力ではとうてい及ばないものだが、この小論のテーマに大きく関わる部分に関して、石澤氏の見解を紹介して、それを検討、批判していきたい。

II-2-1. フロイト

私が最初に注目したいのは、氏が、フロイトのフリースに宛てた手紙¹⁵⁾と、フロイトの失語論文¹⁶⁾を考察した下り¹⁷⁾である。とりわけここで氏は、物体／事柄の知覚からその言語への変換にいたる過程で、知覚内容が脱落し、加工されるさまを指摘している。

記号(Zeichen, signe)が出現するためには、「知覚」においてまず、あるもの(Sache, Ding)についての表象観念(Sach(Ding)vorstellung)が無意識の主体によって捕捉されねばならない。これが無意識の主体のなす「充当」(Besetzung)である。その捕捉される表象観念を仮にシニフィエと名づけるなら—というのも、これは「事後的」にしか名指されないものだから—、無意識の主体のなす連合・連想組み合わせ活動によって、その表象観念を「記号」(Zeichen=signe)とすること(*be-zeichnen*)、すなわちその表象観念を言語レベルで捉えうるために語表象にまでもっていく可能性を具えること(代理・再現すること)を称して、ラカンはシニフィアンと呼ぶ。¹⁸⁾

石澤氏はまず、知覚表象が無意識のレベルでとらえられること、この知覚表象は、すでになんらかの加工がほどこされてひとつのシニフィエとなっており、意識はこれを事後的に、つまりその加工の過程(連合・組み合わせ)も、

そこでなにが起きたかも知ることなく、ただ意識の与件としてとらえ、それを、言語記号にもっていく可能態としてのシニフィアンととらえるのである。私がここで重要と考えるのは2点である。

1. 物体／事柄から語にいたる主体のなかでのプロセスにおいては、シニフィアン／シニフィエが二重で現れる。まず、無意識による物体／事柄の知覚（シニフィアン）のレベルで、知覚内容は書き換えをこおむり、シニフィエになる。このシニフィエは、これをとらえようとする意識にとっては与件、つまりシニフィアンとしてとらえられる。これが語表象を形成するのであり、語の理解とは、このふたつめのシニフィアンのシニフィエへの加工をさすことになる。
2. この二重の書き換え作業のうち、最初の作業は、無意識のレベルで行なわれるために、主体の意識的なコントロールと、作業の意義に対する認識とをすり抜けてしまう。

この状況を、石澤氏はラカンを援用しながらつぎのように述べる。

“Un signifiant, c'est ce qui représente le sujet pour un autre signifiant.” ラカンの与えるこの定義は何度も引かれねばならない。「ある記号化するものが、主体を他の記号化するものへ代行・再現する」とは、主体が意識して記号化したものも、実際には主体が意識しなかった記号化するものへ主体を代行・再現することをも意味する。つまり、ラカンのこの定義は派生的には意識と無意識との交錯関係にすら及ぶ。そこに出現しているのが「在りそこない」(manque-à-être)としての人間存在の主体の姿であり、シニフィアンによって宙に浮かされた主体が絶えずズラされていくほかなきさまである。¹⁹⁾

ソルソに関する前節での考察をふまえて、私はこの事態を、主体による物体／事柄の二重のとらえそこないと表現しておきたい。くわえて、「意識と無意識の交錯関係」にまで、ラカンの定義がおよぶのであれば、無意識の段階でのシニフィアン／シニフィエの脱落／書き込みは、そのまま失われるのではなく、ほとんど失われたかたちで、つまり、かりにその脱落、書き込みが、意識に影響を与え続けられているとしても、意識はそれすらとらえることができ

ない、というかたちで、意識と併走していると考えられる。²⁰⁾ 十分考えられる事態である。いま私がまとめたふたつの点に、第3の点を加える必要がある。

3. 無意識による書き換え作業は、それが意識の与件となった時点でその影響を失うわけではない。この最初の書き換え、最初の脱落／書き込みは、つねに意識に影響を与えうる。

石澤氏の考察をさらに追ってみよう。

「翻訳されない」——フロイトは物表象 (Sachvorstellung [第1段階のシニフィエー筆者注]) が語表象 (Wortvorstellung) に移行する場に最大の関心を抱いた。なぜなら、そこではすべての物表象が語表象に移行するわけではまったくなく、くなにか> (das Ding) がどうしても語表象には至らず、物表象のまま留まってしまうからだ。これをフロイトは「言語によって捉えられなかった観念や翻訳されなかった心的行為は無意識の中に抑圧されて留まる」²¹⁾ と言う。つまりフロイトは、物表象が語表象に移行しない事態を称して「翻訳されない」と呼ぶのだった。²²⁾

「知覚」という人間存在にとって根本的な事象においては、(イ)知覚を通じて導入されるもの、そして、(ロ)その知覚と同時に欠落されるものとが生じる。前者は、物表象 (Sachvorstellung) が語表象に転換して (翻訳されて) 言語の世界に導入されるものを指す。後者は、モノ表象 (Dingvorstellung) がそのまま「死せる主要部分」(caput mortuum) として留まる事態を指す。(中略) フロイトは夙に『心理学草稿』で、

われわれがモノ (Dinge) と呼ぶものは、判断をくだすこと (Beurteilung) から免れた残滓 (Reste) である。²³⁾

と指摘している。²⁴⁾

ここではとりわけ、「心的行為」という表現が、非常に重要である。無意識のレベルでは、心的機能の全体、つまりとりわけ感情が大きく関与していることが示唆されている。この問題は、次節でもう一度とり扱うことになる。

最後に、この受容のプロセスを、石澤氏がフロイトの図式を修正した図²⁵⁾を、さらに (理解しやすいように) 若干修正したかたちで示しておこう。左の1) から4) は、表象のレベルを示している。つぎに横の系列の2段階にある、知覚、知覚記号、無意識、前意識、意識という5つの段階は、もちろんフロイト自身による主体内の機能の区分である。このうち、破線でかこんだ部分は、中枢系での段階をさすと考えられる。

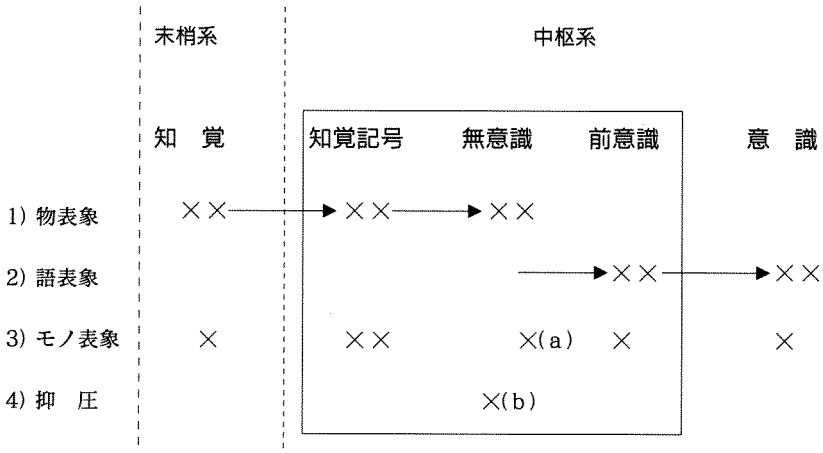


図3：フロイト／石澤の図式

この図には、若干の問題点がある。まず、知覚と名づけられた段階は、神経学的にはおそらく末梢系、つまり視神経を想定してよいと思われるので、私はそれを図の中に書きこんであるが、フロイト自身による説明はわたしにはあいまいである。

[知覚とは]ニューロンであり、そのニューロンの中で知覚が生起し、それに意識が結びつく。しかし、こうしたニューロンは、それ自体としては、起こったことの痕跡をなにもひとつとして保持しない。つまり、意識と記憶とは、互いに相容れず、排除しあう。²⁶⁾

末梢系のニューロンが記憶にいつさい関わらないのであれば、そして、フロイトが意識と呼ぶ中枢系の機能が記憶の把持に関わっているのなら、「互いに相容れず、排除しあう」のは、末梢系と中枢系、つまり「ニューロン」と「意識」のはずである。私にはこの下りは理解しがたい。あるいはこれは、末梢系のニューロンと「結びつく」意識のニューロンは、記憶を把持するニューロンとは別であるとの主張か。そうだとすると、現在の大脳生理学的な知見に照らして、私には納得がいきがない。

また、先に述べたように、無意識のレベルでの×(b)の脱落は、潜在的にで

はあれ、つねに意識に影響をおよぼしうる状態で、意識と併走するとすれば、この図にそれは明示されていない。さらにより大きな問題は、この図では、表象に対する感情要因を示すことができない点である。これは石澤氏も指摘するとおりだが、この問題は次の節で取り扱うことにする。

いずれにせよ、この図がはっきりと示しているのは、無意識の段階での表象の分離と脱落である（×(a)と×(b)）。石澤氏はこう述べている。

本来はシニフィアンであった×(b)が、3層目から4層目に落ちることによってシニフィエになってしまい、無意識の主体はそうしたシニフィエとしての×(b)によって×(a)に代理されているにすぎないと言える。（中略）

しかし4層目のレヴェルで、シニフィエでしかないこの×(b)は、シニフィアンとして浮上（auftauchen）しうる。しかしその浮上はあくまでも代理を通じてのみ可能となる。表象（Vorstellung）のレヴェルで言うなら表象から抑圧されている「最初のシニフィアン」であり、かつまた情動（Affekt）のレヴェルで言うなら抑圧のシニフィエでもあるこの×(b)の存在は、いわゆる「言語学」の側からは想定されない。つまり、いわゆる「言語学」は、欲望のなす分節化（articulation）を、……その考察から捨象してしまう。²⁷⁾

抑圧された×(b)は、本来無意識の段階で、〈情動〉、つまり感情によって書き換えをおもったシニフィエだったのだが、無意識はそれを代理するもの、この書き換えと脱落とによって加工されてしまった×(a)を、シニフィアンとして前意識に手渡している。前意識と意識は、その操作を知るよしもない。これは前に述べたとおりである。私の注意をひくのはこの引用の後半、×(b)が「情動」によって抑圧されていること、また、いったんは抑圧された×(b)がふたたび現れうること、が明言されている点である。これは、私がさきに述べた、文学の受容における感覚／感情の要因と、ソルソの検討でふれておいた、知覚／認知の際の脱落と書き込みという2点に関わってくる。

ちなみに氏は、こうした脱落と書き込みを免れえない人間の知覚のプロセスを、徹底して人間存在の「本来的な疎外状態」²⁸⁾として悲観的にとらえているが、その感情は精神病理学の臨床的な現場から、またおそらくは氏に固有の世界感情としては十分に理解できるとしても、私はそこまで踏みこんだ内観的な判断はさし控えておきたい。この件に関しては、後述する。

II-2-2. ソシユール

つぎに石澤氏は、フロイトに関連させて、丸山圭三郎の『ソシユールを読む』²⁹⁾を検討しながら、ソシユール自身の記述に考察を加える。

…丸山は、『ソシユールを読む』で、ソシユールのノートからの1文を引用する。

物質的な音 (son matériel) に対置しえるもののうちに、観念 (l'idée) がある
 ということは根底から否定せねばならない。物質音に対置可能なものは、「音＝
 観念」son-idée) であって、絶対に「観念」ではない。³⁰⁾

ついで丸山は、この「音＝観念」とは、ソシユールの『講義』で言われることになる
 「思考＝音」(pensée-son)と同じ概念であると至当にも指摘する。丸山とともに筆者
 もこの問題の重要性を見逃すわけにはいかない。というのも、「物質的な音 (son
 matériel)」に対立するのは、観念ではなく、音＝観念であるとするソシユールの指摘
 は、「分節(化)」(articulation)の問題に関わるからである。実際、『講義』でソシユ
 ールが「神秘的な事実」と呼ぶのは、「言語学の究極的な単位」である「思考＝音」(pensée-
 son)が、分割 (divisions) を含意 (impliquer) する事態に³¹⁾ ほかならない。

(中略)

言語学の領域とは、分節 (articulation) という一般的な (commun) 領域であ
 る。

その分節とは、"articuli" (関節、区切り、断片) のことであり、こうした小さな
 断片の中でこそ思考が音を介して意識化される (価値化される) のである。³²⁾

つまり、「思考が音を介して意識化される」ことが起きる分節化 (articulation) がな
 されるまでは、観念・思考は物表象 (Sachvorstellung) として無意識の中にある。こ
 れが意識化されるためには、最も単純かつ最も厄介な意味でのシニフィアンである
 「音像」(l'image acoustique)、すなわち「音」を介さねばならない。³³⁾

この考察をとおして石澤氏は、ソシユールがただ単純に「音」(シニフィアン)と
 「観念」(シニフィエ)とを唯一の2項として併置したわけではないことを
 まず精確に指摘している。ソシユールは、「音」はまず、その「音」の「観念」
 としてとらえられ、そのあとでこの「音＝観念」が、「思考」によってあらた
 めてシニフィアンとしてとらえられて、意識化されると述べている。「分節」
 は、意識できないレベルで、すでに起きてしまっているのである。氏がフロ
 イトをめぐる考察ですでに指摘していた2重のシニフィアン／シニフィエ関
 係が、ソシユールにも明確に意識されていたのである。

当然石澤氏は、この点をフロイトに結びつける。石澤氏はまず、エングラ
 ー版のつぎの箇所を引用する。

ことばの事実に関するすべての規則，すべての文，すべての語が必然的に喚起するのは， a 対 b という関係か，あるいは $\frac{a}{a'}$ という関係であって，これを切り離して分析すると何も意味なくなる恐れがある。これはまさに， a と b という辞項は，そのままでは意識の領域に達することは徹底的に不可能で，意識が知覚するものは常に a と b の間の差異でしかないという理由からである。したがって，こうした辞項のそれぞれは，精神のねばり強い洞察から生じるような法則とは別の法則に従って自由に変わったりする。³⁴⁾

石澤氏はこの箇所を，つぎのように敷衍している。

「精神のねばり強い洞察から生じるような法則」，換言するなら，「意識」を限りなく集中させることで了解されうる法則とは「別の法則」に従って変動するとは，まさに「無意識の法則」に従って変動することを指す。(中略)

この問題を当初から取り上げていたのがフロイトの「判断」についての考察であった。「判断」(Ur-teil)とは本来「始源的な分割，根源的な部分化」を意味することを思い起こすなら，コトーソシュールの言う「無定形の塊」(la masse amorphe) —がことばに位相を換える以前に，「知覚」による「記号化」という「始源的な分割」がなされること，またそれが「意味するもの」(signifiant) となるためには，「意味されるもの」(signifié) との同時発生，そして後者の「事後的」な現出の可能性が前提であるということ，さらにこうした経緯からこそフロイト精神分析の言語論が導き出されたことを了解しなければならない。³⁵⁾

ソシュールとフロイトの言語論をむすぶ氏のこの考察は，みごととしか言いようがない。これほどはっきりと，ソシュールのシニフィアン／シニフィエが二重の構造を持っていること，そして，最初の「分節」，つまりある語音の切り出しは，意識されない段階ですで行なわれてしまっていることを，いままでどの研究者も明瞭には意識していなかった。さらに，この二重構造は，フロイトが物体／事柄の言語による把握に際して，精神分析の立場からつとに指摘していたことと完全に一致することも，氏がはじめて指摘したことであると思われる。

こうして私は，石澤氏の考察を経由して，ほかならないことばの受容を行なっている文学の受容に関する，大きな示唆を受けることができるにいたる。今までの考察で十分に明らかになったこと，物体／事柄の言語による受容は，意識化できない分節化（第1のシニフィアン／シニフィエ）と，意識が行なう分節化（第2のシニフィアン／シニフィエ）とのふたつの段階に分かれて

いる。ことばが、最初にも述べたようにやはり、まずもって、通常の感覚的な知覚対象であることを考えれば、この二重の分節化は、じつはそのまま言語の受容に際しても起きていると考えて、いっこうにさしつかえない。言語の受容においても、無意識と意識、そして感情による脱落と書き込みが行なわれているのだ。言語学はこの事態をとらえていない。また、ソルソを検証した際に明らかになったように、認知心理学もまた、生理学的な観点から二重構造をテーマ化してはいるものの、この二重構造のなかで起きる脱落と書き込みが、意識による制御をまぬがれている部分を持っていること、またそこに、潜在的／顕在的に情動、あるいは感情が、重大な要因としてからんでいることを考察するには、いまだにあまりにも無力である。

II-3. 感情

いよいよ私は、おそらくもっとも厄介な問題に首をつっこまなくてはならなくなった。言わずと知れた、感情の問題だ。文学にかぎらず、言語をもふくめて、人間のあらゆる物体／事柄の受容過程には、情緒的な反応がからんでいる。認知心理学、あるいは一般に認知科学は、「認知」ということばの定義にしたがって、受容過程から情緒的な要素を排除している。感情をとらえることの困難さ、感情に関する信頼度の高いデータがほとんど存在しない現状を考えれば、これはあまりにも賢明な方策といえるのだろう。

しかし、知的な受容活動を「認知」行為ととらえて、これを感情性から切り離すという手続きは、それが認知科学に大きく貢献している実情はあるにしても、はたしてどれほどの妥当性と信頼性があるのだろうか。感情は、知的な判断に附随する、副次的な要因で、これを除外しても、知的な判断が、無傷のまま、とどこおりなく行なわれるのだろうか。

最近、ほかならない神経学の立場から、ダマシオがこれに異義を唱えている。彼は、脳の前頭前・腹内側領域 (ventromedial prefrontal region) の損傷が、意思決定と情動反応の双方の機能をいっきょに失わせることを、解剖学的に検証しながら、知的な判断が、じつは感情／情動に支えられてはじめて遂行されるという仮説、さらには、感情／情動は身体的な機能と中枢系

との相互作用によって生じるというソマティック・マーカー仮説を立てるにいたっている。³⁶⁾ 神経学や大脳生理学におけるデータの蓄積が、まだとても十分とはいいがたい現状、したがってこの分野での研究は、巨大の仮説のわずかな部分データによる検証というモデル構築の域を出ていない現状、さらに、知的な情報処理だけに焦点を合わせた研究がもてはやされている現状を考えると、ダマシオの功績は非常に大きく、しかも残念なことに、あまりにも遅いと言わざるをえない。

私は、神経学的な仮説を検証する能力は持ち合わせていないので、ダマシオの仮説が妥当かどうかを判断する立場にはない。だが、基本的な発想の時点で、研究の経済性から、あるいはひょっとしたら啓蒙主義的な先入見から、最初から知性と感情の役割を区分して、さらには知性の優位を前提としてしまうような観点を批判するダマシオには大いに賛同する。知性と感情を分離する立場が、たんなる立場にすぎないのであれば、人間の営みがつねに知性と感情との相互作用によって成り立っているという立場も、まさにそれがたんなる立場であるために、可能であるし、そこから出発した理論モデルを構築しても、なんのさし支えもないはずだ。また、みずから神経学者であり、さらにまた、脳損傷という局在論的なデータをその出発点に選びながらも、中枢神経だけではなく、身体全体にも感情の発生地点をみとめて、やみくもな〈唯脳論〉や局在論を手厳しく批判するダマシオの姿勢を、私はおおいに歓迎する。

ところで、感情というタームは、知性というターム同様、あまりにもあいまいである。とりあえずこの小論では、私は、末梢神経、たとえば視神経や聴覚神経といった、解剖学的に中枢系と区別しうる部分が興奮すると考えられる事態を〈感覚〉、それ以外の情緒的な反応の一切を〈感情〉としておきたい。一般に情緒反応は、さらに情動と感情とに区分されるが、この区分は、少なくとも私の小論のなかでは、煩瑣なだけなので割愛したい。知性と感情との区分は、上に述べたことからうかがえるように、じつは相当うさん臭い。とはいえ、この区分は、思考の経済性を促してくれるという利点があるので、大きな問題が発生しないかぎり、使わせていただく。ただ、つぎの点は断わっ

ておきたい。まず、私は感情と知性との区分を、近ごろの脳研究にあらがちなように、そのまま解剖学的な身体の区分としては、絶対にとらえていないこと。また、この区分は仮説というよりは、あくまでも思考の経済性によるもので、この区分が不当と思えた時点では、いつでも撤回する用意があること。

前置きが長くなった。文学の受容という観点から、感情がどのようにからんでくるかを考察しよう。この考察に関しても、その糸口を与えてくれるのは、石澤氏である。

「意識のなす分節化（差異化）」³⁷⁾以前に、まず快・不快に基づく無意識のなす分節がなされる。これこそフロイトが注目していた「判断」(Urteil)の問題だった。この論点を理解せずして、「精神分析」と「言語学」との根本的な関わりとその分岐点を捉えることはできない。無意識のなす分節化によって、すなわち快楽原則のなす差異化によって、意識に上ってくるのは、まさに快として感じられたものだけだ。しかしそこで分節化、差異化されたもののうち、不快と感じられたものは抑圧され、意識すなわち言語のレベルには上ってこない。

氏が「情動 (Affekt)」と呼ぶ感情が、ここでは〈快楽原則〉として述べられている。〈快楽原則〉は、精神分析の立場からすれば、判断、それも、言語のレベルで意識が行なう知的な判断に先だつ無意識レベルでの判断の主役である。精神分析の立場は、感情が物体／事柄の受容に最初から大きな影響を与えていることをはっきりと認識している。石澤氏と同様に、私も、文学の受容を考察する際に、言語学的な思考法をまったく視野に入れていない理由が、ここでまた明確になる。ソシュールをのぞいて、またおそらくはわずかにクリステヴァをのぞいて、言語による受容の際に感情が決定的な役割をになっていることを、少なくともテーマ化した言語学が、どこにあるというのか。

こうして、じつにやっかいな状況が明らかになる。物体／事柄、あるいはさらに言語の受容においては、意識的な脱落／書き込みに先だって、無意識的な脱落／書き込みがおきる。しかも、この無意識による脱落／書き込みは、意識にとらえられないまま、意識による〈判断〉と併走しうる。さらに、無意識による脱落／書き込みは、感情によるものであり、したがって、感情は、やっかいなことに、意識の直接的な反省の対象となることがないまま、意識

と併走するのである。

ただし、この時点で私は、精神分析的な立場には別れを告げる。無意識における判断の主役としての感情は、はたしてフロイト流に、快と不快という2項にまとめられるかどうか、私には疑問だ。たしかに感情は、生得的な機能だろう。だが、経験による学習が長期記憶として保存されていくにしたがって、感情はその内容と機能が大きく変わっていくのではないか。その複雑な容態を、快楽原則だけでまとめることの是非を問う論争に、私はいまは関わりたくない。文学の受容に関する私の考察にとっては、快楽原則は、いまのところ、さほど大きな意味は持っていない。感情は、さきに述べたとおり、末梢系による感覚とは区分された、それ以外の情緒的な反応の一切に与えられる名称、というだけにしておく。

もう1点。精神分析的な考察では、無意識のレベルで潜在化したままの感情(快・不快)だけが取り上げられるくらいがあるが、感情は顕在的にも活動しているものである。私の作業にあつては、顕在的な感情も当然重要な要因である。私の作業の枠のなかでは、潜在的な感情をことさら快・不快の感情に限定する、また、顕在的な感情を、これとはことなった心的メカニズムとして区別することに、さほどの利点はないと考えられる。

感情の内実をつぶさに分析して、その動因までつきとめることは、私ならずとも、ほとんど不可能と言っていいのが現状である。そこで私は、少なくとも、物体／事柄、したがってまた言語の受容に際して、感情がきわめて重要な要因であり、しかもそれが二重の作用をおよぼしていることを指摘するにとどめたい。二重の作用というのは、いうまでもなく、まず、無意識レベルでの意識化されない感情的な判断であり、そして、受容の際に、あるいはおそらく受容の主要動因として、意識されるかたちで感情が活動する事態のことである。これを除外した文学の受容に関する立論など、あろうはずもない。

無意識のレベルで、感覚に与えられた対象が、まず感情によって加工されることは、これまでの考察から明らかである。この点に十分な注意をはらえば、文学研究に関して、以下のことが確認できる。

1. 言語の受容においては、「認知」という知的な作業枠がそれをとらえる以前に、知的な対象の判断とはことなった判断が、すでに行なわれてしまっている。
2. 〈言語学〉は、意識の材料としての言語というシニフィアン／シニフィエよりも前に、感情が言語的な知覚対象をすでに分節化してしまっている事態をとらえることができない。
3. 認知心理学は、この初期的分節化については、語るすべを持ってはいない。
4. この分節化をとらえる作業は、いまのところ精神分析的な仮説と観察をモデルとして援用するか、それとも、まだ揺りかごの時期にあるといわざるをえない神経学が将来提供してくれるだろう、信頼性の高いデータが蓄積されるまで、考察をさし控えるかしかない。
5. したがって、この事態を視野に入れた文学研究は、精神分析、臨床医学、またひろく心理学との共同作業をする必要がある
6. 言語の受容は、ほかの対象の受容とまったく同様に、意識化できる受容のレベルでも、感情が大きな影響を与えている。
7. その際感情は、知的な判断の枠組みと、その作業の進行の両方に、決定的な影響を与えている可能性がある。
8. 文学の受容は、最終的に知的な判断を目ざす必然性がまったくないので、文学研究が感情を、知的な判断を操作して狂わせる阻害要因としてとらえることは許されない。
9. したがって今後文学研究は、感情という動因をより綿密にとらえる必要がある。
10. このため、意識化できるレベルでの言語の受容に関しても、文学研究は、やはり精神医学に代表される臨床医学、心理学などとの共同作業を行なっていく必要がある。

III. 仮説モデル

III-1. 汎用モデル1

文学研究の基礎になる物体／事柄の受容の仮説的なモデルを構築する作業にはいろいろ。認知心理学と精神分析という、一見、あまりいい折り合いがつきそうにもないふたつの理論モデルを接合して、なんとか使えるものにするというチカラワザである。

このチカラワザを実行するにあたっては、やはり、いままでの考察に若干の修正を加える必要がある。それに大きく関わってくるのは、意識／無意識という考えかたにしたがって、どうやって認知心理学的な知覚のフローチャートを発展的に改善できるか、また、感覚／感情の関与を、どう位置づけるべきか、という2点である。

認知心理学が用いている知覚のふたつの入力レベルという図式、つまり末梢系の処理によるボトムアップレベル（ボトムアップ1）と、中枢系による、とはいえ学習や経験とはほとんど関係なく、（たとえばゲシュタルト知覚のように）生得的に知覚内容を判定すると考えられているボトムアップレベル（ボトムアップ2）という図式は、すくなくとも「認知」、つまり感情的な要因を度外視した対象受容のモデルとして、非常に魅力的だ。このうち、末梢系によるボトムアップ1のレベルは、特殊な実験が示すデータとしてのかたち以外では、日常的にはまず意識されることがないといってよい。つまり、この段階で、意識や無意識といったことを問題にする必要はなさそうである。

しかし、ボトムアップ2に関しては、若干の注意を要しそうである。認知心理学者にしても、このレベルにはたして学習や経験、つまり長期記憶が関与していないかどうかは、意見が分かれるところだろう。たとえば失認症といった臨床レベルでの所見にしても、その原因がもっぱら脳の損傷だけによるものかどうかは、いまだに決着をみていない。かりに、というよりも、現状では、ボトムアップ2のレベルに、長期記憶、つまりは感情性も無意識による操作とともにふくんだ要因が関与している可能性を排除できないのであ

れば、すでにボトムアップ2の段階で、意識を逃れるかたちで、脱落と書き込みが起っていると仮定する余地は十分にある。ボトムアップ2をどう位置づけるかという論争は、関係する方々にお任せするとして、私としては、このような留保がつくかぎり、ボトムアップ2を安定したレベルとみなすことはできない。そこで私は、このボトムアップ1とボトムアップ2という、神経ネットワーク的な区分を採用しないで、むしろ、まちがいなく末梢系による入力処理といえるレベル、つまり、意識／無意識の関与がないと断言できるレベルと、そうではないレベルという、より大まかなふたつの区分を採用したい。とはいえもちろんこの提案は、将来のデータの蓄積による変更を受け入れないものではないことは、いうまでもない。だが、無意識的な操作が、たとえ「事後的」にであれ、意識のレベルと併走して、最初から、そしてつねに意識に影響を与えている可能性を考慮すれば、意識と無意識の双方が、それぞれことなったレベルで、とはいえ相互に影響を与え合いつつ、末梢系による知覚以外のあらゆるレベルで関わっている、と仮定するモデルを考えるのが賢明だろう。

感情の関与はもっと複雑である。いや、関与などということばでは到底足りない。テレビや映画を見る、CDの音楽やライブを聞く、漫画や本を読む、絵や写真を見る、飼い犬や桃の実やゴキブリを見る、仕事で人に会う、遊びで人に会う、といった、ごくありふれた行為、このごくありふれた行為をとらえなくてはいけない。こうした行為にあっては、感情は主たる動因ですらある。私がだれかに会う、そのとき、私は「この人は温厚な人柄である。」という命題的な、したがって知的な判断を、すくなくともそれだけをしているわけではない。私は、「なんていい人なんだ!」と思ったりもする。文学については、いわずもがなである。さきに紹介したダマシオの仮説をより強く理解すれば、そもそも感情がからんでいない活動などありうるのか、といった立論も可能だ。〈感情をまじえない〉知的な判断、というのは、内観法的には、感情がまったく(?)発動していないか、それとも、〈意志〉で感情を抑えこんでいるか(これもある種の「抑圧」である)、というふたつの想定が可能だと思われるが、このふたつは、きれいに分離して観察できるものなのか。〈意

志〉は、感情とは関係のない心的機制なのか。

私は、強い立論を選ぶ。物体／事柄の受容過程において、感情的なレベルと知的なレベルとをきれいに分離する手続きに疑問が残るかぎり、この分離は棚上げにしたほうがよい。感情と知性とが、それぞれ〈独立した〉作業分担者で、〈必要に応じて〉両者がコミュニケーションをとって意見調整をするとは、とても考えにくい。受容のただなかにあつては、感情と知性は、きわめて複雑にからみあつて動いている。感情的な判断と、知的な判断というのは、意識が、受容過程のただなかで、あるいは受容過程の終了した時点で、反省的に、つまりは事後的に、その過程のアウトプットを操作的に分離した結果である、と私はとらえる。

したがって、感情もまた、とりあえずは、末梢系による知覚情報の入力以外のすべてのレベルに関わって動いると、私は想定する。とりあえず、という留保がついているのは、末梢系による入力は、単なる初期段階としてある時点で終了してしまつて、あとはつぎの段階が発動する、という図式では、あまりにも単純だからである。実際には、物体／事柄の受容過程が、一定の時間持続する活動だということを考えれば、感覚活動は、そのほかの受容活動と並行して、つねに行なわれている。したがって、感情的／知的レベルでの活動が、感覚にフィードバックをかけている可能性は、完全には排除できない。こうした留保を十分に考慮したうえで、ここでは私は、これもまたとりあえずだが、おそらく末梢系による感覚活動は、ある程度独立した活動であり、感覚以外のレベルが、感覚活動の提供してくるさまざまな情報をそのつど取捨選択する、つまりは脱落／書き込みを行なう主導権を握っているもの、と考えておきたい。

考察の要点をまとめると、つぎのとおりである。

1. 物体／事柄の受容過程は、末梢系による入力レベルと、それ以外のレベルのふたつにわけることができる。
2. 末梢系による知覚は、まず、物体／事柄の受容過程の初期レベルを形成する。

3. 当然このレベルで、知覚対象は、受容器官に固有の脱落と書き込みをおこむり、知覚はこうして書き換えられた内容を、それ以外のレベルに手渡す。(書き換えⅠ)
4. この知覚は、受容が続いている時間、たえずその受容と併走して動いている。
5. 知覚による受容活動とはちがったレベルと考えられる、感情的／知的な受容のレベルでは、感情と知性が双方ともに、からみあったかたちで動いている。
6. このレベルでの操作には、意識化できるものと、意識化できないものというふたつのレベルが、併走するかたちで存在する。
7. 意識化できない操作によるレベルでの、知覚内容の書き換え(書き換えⅡ)、つまり脱落と書き込みは、当然(まずもって)意識されない。
8. 意識できる操作のレベルにおいても、記憶との参照、そのつどの感情の状態などによって、感情／知性による書き換え操作が行なわれる。(書き換えⅢ)
9. 意識は、必要に応じて、このレベルでの操作を、反省的に、感情的な判断と知的な判断とに分離することがある。ただしこの操作はオプションである。

この要点をふまえて、汎用モデルのひとつのかたちを、図4に示してみよう。

末梢系の感覚と、無意識、意識のそれぞれが、物体／事柄の受容に費やされているあいだずっと、作動していることは、各レベルが重なりあっていることで示される。

末梢系の知覚は、当然人間の感覚装置の固有性にしがたって、物体／事柄のある側面だけを切り出しているのです、別の側面は脱落することになる。また、知覚された側面も、当然、物体／事柄を〈あるがままに〉感知しているわけではないので、ここで最初の書き換え(書き換えⅠ)が起きる。

無意識のレベルでの書き換え(書き換えⅡ)は、さきに述べたとおりである。

物体／事柄受容の汎用モデルの構築

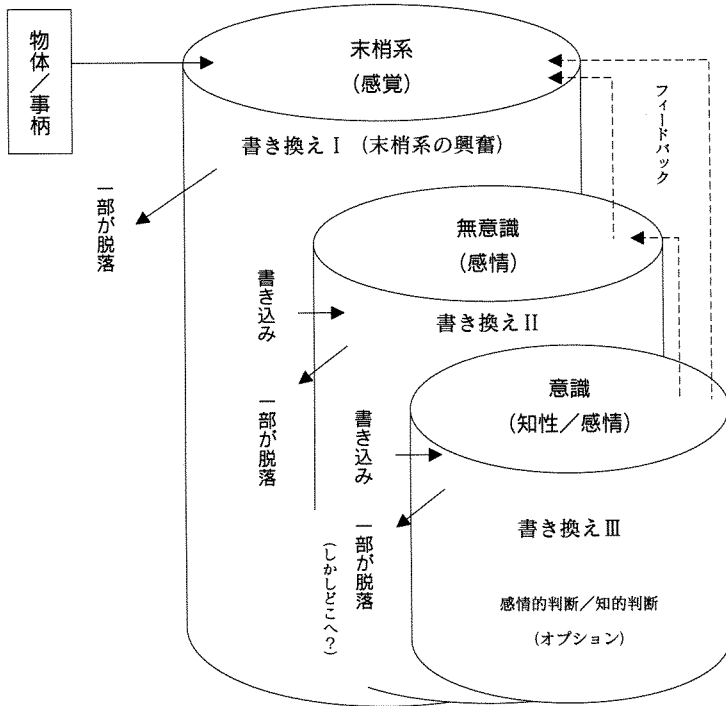


図 4：物体／事柄受容の汎用モデル 1

意識による書き換え（書き換えⅢ）は、この小論のⅡ－２では、もっぱら無意識レベルから意識レベルへの移行にともなう起きるという所見の域を出るものではなかったのだが、じつは、意識のレベルでも、脱落と書き込みとが起きていることは、とり立てて指摘するまでもないだろう。私がしっかりと見たと思っている絵、しっかりと読んだと思っている本でも、そのディテールにいたるまで、すべて記憶しているわけではなく、この段階でも、たとえば注意の範囲をこえろといったかたちで、脱落が起きる。また、無意識が手渡す内容が、さらに（意識可能な）長期記憶、感情の状態などと照らし合わされて、書き換えられる。こうした事態も、モデルのなかに書きくわえてある。書き換えの一部は、無意識の操作を受けているだろうが、すべてが

無意識によると考えるいわれもない。(それにしても、このレベルで脱落してしまうものは、いったいどこへいくのだろうか？ 記憶の奥底に沈むのか、それとも完全に消失するのか？ 謎だ。)

III-2. 汎用モデル2

これで、ごくおおざっぱなかたちで、物体／事柄の受容の基礎的なモデルを示すことができたと思う。

ただ、いままで触れてこなかった問題がひとつある。それは、シニフィアン／シニフィエというタームに関わっている。シニフィアンを切り出す、とは、分節化のことである。分節化は、汎用モデル1で示したすべてのレベルで行なわれていると思われる。そこには問題はない。だが、シニフィアンを切り出す、とは、同時にまた、記号化 (signification) を意味している。そして記号は解説されるための分節である。ここに問題がある。いったい、通常の物体／事柄知覚の過程において、すべての分節が記号化をこおむると仮定していいのか。

具体的な例で考えよう。私は詩を読む。私は、漫然とその詩に脚韻や頭韻や、はたまた行中韻までがあることを意識する。あるいは私は、漫然と、この詩にはやたらに漢語が多いな、と思う。私はカフカの『変身』を読む。ザムザが虫に変わったとある。へえ、そうか、と思う。とりあえずそういうことにしておこうと思う。私はレンブラントの絵を見る。なんだかすごいマチエールだなと思う。こういうほんとうに漫然とした意識もまた、りっぱな意識の内容である。だが、こうした内容が、それに続くこれといった知的な、あるいは感情的な判断という解説作業をひき起こさないまま、保留されたままだったり、ときとして忘れ去られてしまったり、という事態は、頻繁に起こっている。この事態はあらためて次節で、文学の受容モデルを考察する際に、具体的に示したい。

こうして私には、意識に与えられる分節を、即座に記号化の材料とはしない意識の〈あそび〉の空間 (Spielraum) があると思われる。人間存在をふくめて、私たちが存在している世界に、本来、〈意味〉はもちろんない。それに

〈意味〉を与えてるのは、ほかならない私たちの仕業である。私たちが物体／事柄をなんらかのかたちで受容している際にも、私たちはつねに〈無意味〉にさらされている。意識に与えられる分節が、つねに〈意味〉を求める身がまえに捕捉されるとはかぎらない。つまり、分節はさしたる知的／感情的な〈意味〉に翻訳されないままのかたちで受容されるケースも考えられるのである。こうしたかたちでの分節を考慮して、分節にはもう1段階、ほかの名称を与えておく必要がある。

それは、以前私が提唱した「アスペクト」というタームである。³⁸⁾ むろんこのタームは、言語学（文法理論）における用法とはまったく関係がない。私はこのことばを、原義どおり、「見え」という意味で用いている。分節をアスペクトと呼んで、それが、意識による記号化（シニフィアン／シニフィエへの加工）の前の段階であることを明示する必要がある。意識は、無意識を経由して手渡された知覚内容を、あらためて〈知覚〉する。ただ、この〈知覚〉内容、つまりアスペクトは、とりあえずはそうしたものとして意識にとらえられる。そのあとで、アスペクトは、記号化のプロセスに手渡されるか、あるいはそのままアスペクトとして、記号化や判断をほどこされないで受容されるか、あるいはなんらかのかたちで放棄されて脱落するか、のいずれかであると考えられる。なお、このうち前二者の工程は、フィードバックがかかって循環的に行なわれると考えてよい。

ここまで考察をすすめて、私はさきに示した汎用モデルに分節化と記号化を書き込んで、最終的なモデルバージョンの提案（図5）として示したい。このバージョンでは、意識レベルでの書き込みと脱落が、アスペクトのレベルではなく、記号化、つまり書き換えⅢの工程で起きることを明示している。

じっさいの物体／事柄受容の過程では、末梢系からはいつてくる分節は、場合によってはおびただしい数にのぼる。したがって、無意識／意識双方のレベルで、各々の分節どうしが相互に参照しあって、変形、加工を受けているとも考えられる。意識レベルでアスペクトととらえられる、これまたおびただしい数の分節もまた、相互に作用しあっていると思われるが、そこには、

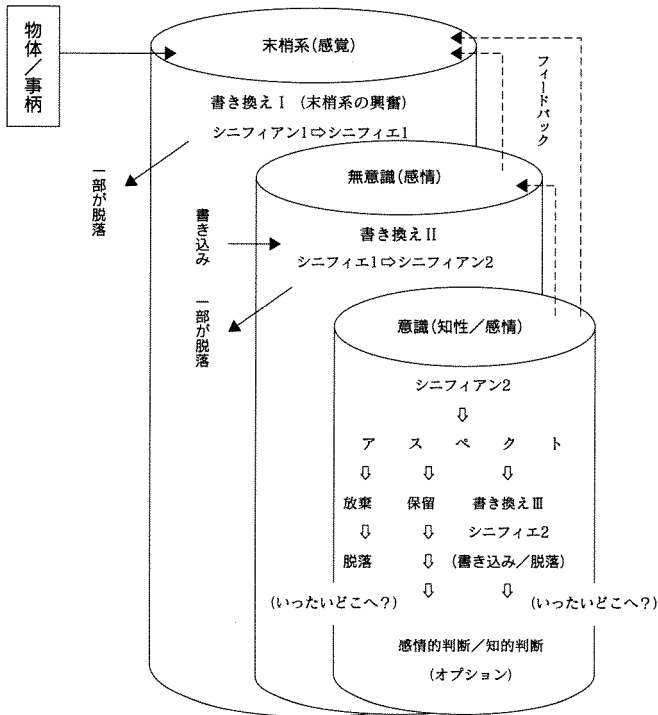


図 5：物体／事柄受容の汎用モデル 2

あるアスペクトの集合と、書き換えⅢによってシニフィアンとなったアスペクトの集合との、任意の相互作用も含まれてよい。要は、どのレベルでも分節は相互に作用しあっているわけだが、それはモデル図を煩瑣にするだけなので、図示はしていない。

IV. 文学の受容

この小論で最後に残された作業は、いままで検討してきたこと、その結果として提案された物体／事柄の受容に関する汎用モデル 2 が、テキストの受容という現場を観察する際に有効性を持っていること、そしてそれが、文学

という現象を研究するための、さまざまなブランチを生み出していくきっかけをあたえつつあることを明確にすることである。

小論のはじめに、八木重吉の詩のさまざまな受容のさまを紹介して、すでになにが問題となり、なにが解決されるべきかは示唆しておいたが、ここでは、さらにいくつかの具体的な例を示しながら、汎用モデル2という仮説にしたがって、おもに意識のレベルでどんなことが指摘できるのかを示していきたい。

なお、末梢系での視覚的、聴覚的な言語情報の処理がどうなっているかは、私の研究能力にあまる分野である。これは、専門の研究者の方々に、実験や臨床的なデータの蓄積と解析をお願いするほかない。ただ、末梢系の知覚もまた、無意識的／意識的なトップダウン操作を受けている可能性は十分に考えられるので、この分野でも、作業仮説を設定する段階で、それを考慮に入れておく必要がある。

さて、ふたたびテキストの受容の現場にもどろう。

まずは視覚にからんだ観察点。八木重吉の詩の例ですでに指摘しておいたが、書字テキストの場合、じつは視覚的な刺激が大きな要因としてからんでいる。人間の目は、テキストのある一定の範囲をブロックとして知覚しているが、たとえば通常の散文とはことなった改行を頻繁にくり返す詩の場合、テキストの受容過程は、ひとつの行を、ひとつのまとまりとしてキャッチするだろう。この情報は、テキストの意味的な分節、読みの時間の制御に大きな影響を与える。また、重吉の詩や、たとえば中勘助の『銀の匙』などの散文に現れる1字分の空白も、これと似たような現象として観察される必要がある。

もっと身近で分かりやすいケースは、表記のしかたそのものである。広告、雑誌の表紙、見出しなどでは、印字の色、字体、字の大きさ、レイアウトなどに大きな注意がむかう。書籍でも、印字のフォント、ポイント、段組、また、使われる用紙の色、材質なども、視覚情報処理に関係している。こうした分野の研究、また、こうした要因が読みの現場でどのような影響を与えるかに関する研究は、未開拓のままである。

聴覚に関しては、私はまったく手薄であることを白状しておく。ただ、視覚に関する観点と同様の見地から、この分野での研究もぜひとも必要であることは言うまでもない。

簡単かつ劇的な例を示したい。私も、よく外国語の歌を聴く。外国語を聴きとるのは大変だ。私がそれなりに習得している英語やドイツ語でも、歌詞の全部を聴きとれないことはしょっちゅうある。それどころか、母国語ですら、ときとして聴きとりは大変だ。ワーグナーの『トリスタン』を上演していた劇場で、隣席のドイツの老婦人が私に尋ねてきた。「あなたはドイツ語が分かるの？」私「まあ、それなりに。」婦人「じゃあ、このオペラも分かるの？」私「いいえ、聴くだけじゃ、とっても無理ですね。あなたは全部聴きとれるんですか？」婦人「バカなこと言うんじゃないですよ！　だってワーグナーよ！」あるいは、結婚式の上で、友人が善かれと思って朗々と歌う英語の歌が、じつは別れの歌だったりする。私も、そして数えきれない人たちも、しばしば、外国語の歌を、歌詞をきちんと理解することもなく聴いて楽しんでいる。そんなとき、いったい私は、あなたは、なにを「聴いて」いるのか？

外国語なんて分かるもんかと居直って、「聴いて」いるのはまったくことばではなく、楽器演奏と、たんなる声としての歌だけだと、あなたには断言できるか。たしかに私にも、そんなときもある。イタリアで耳にして、気に入って即座に買ったシングル盤には、歌詞カードがない。イタリア語がまるでダメな私は、歌詞がさっぱり分からない。なのに、それは私の愛聴盤になっている。しかし、どことなく英語が聴きとれる歌もある。こんなとき、少なくとも意識できるレベルでは、私は歌を、たんなる聴覚的な快樂として、あるいは、ちょっと歌詞を分かりながら、あるいはまるごと歌詞を分かったつもりになりながら、聴いている。つまり、こうした場合、歌は、そこにことばがあるからといって、即座に言語記号の処理に入るとはかぎらないのだ。むしろ、聴覚的な刺激が、(少なくとも意識できるレベルでは)私の知覚に都合のいい分節化をほどこされ、その分節は、記号化されるよりも前に、記号化とは関係のないたんなる分節、さきに私が述べたアスペクトとして受容されて、そのあとで、そのアスペクトのうちのいくつかが、意識のなかで感情あ

るいは知性による書き換えをこおむるのである。

つぎに、井上陽水の「My House」の一節を観察してみたい。

- 1 恋はマッシュポテトだ
 - 2 恋は電子キャラメル
 - 3 街の道に無知な人並
 - 4 山羊の耳に盛り上げ製菓
 - 5 誰がミック・ジャガーだ
 - 6 どこがチャイナタウンだ
 - 7 海を越えたムラサキ電話
 - 8 古い事は明治らしいわ
- (中略)

(refrain)

- 9 俺の悲しみは ma, ma, ma,
- 10 mamama, mamama, mama, ma
- 11 雪の白アリは
- 12 分からんム

「分からん」歌だ。私が知っている範囲で、この歌をみごとに〈解釈〉しおこせた者もない。ところがこの歌は、それなりに流布して受け入れられている。「分からん」のに「好きだ」と断言してはばからない者（私もそのひとり）もいる。

全体として、この歌詞は確かに「分からん」。だが、全部皆目チンプンカンブンというわけではない。ちょっとていねいに分析してみよう。まず最初の8行。

まず、聴覚的にキャッチできること。

- ・この歌詞には、脚韻らしきものがある。（5行めと6行めは「da」，7行めと8行めは「wa」で終わっている。）
- ・不完全だが、1，4，5，6，7，8行は、すべてa音で終わっている。

- ・頭韻、あるいは頭語反復(anaphora)もある。(1行めと2行めの「恋は」。
- ・不完全だが、頭韻らしき音合わせもある。(5行め冒頭、「街の」と、6行め冒頭「山羊の」は、ともに a-i-o という母音の連鎖。)
- ・きわめて不完全だが、5行め、6行めの冒頭は、ともに子音 d で始まっている。
- ・ここまでくると、7行めと8行めの冒頭(umiwo-furui)にも、なんだか u 音が優勢な感じがしてくる。
- ・一定のルールがあるような音連鎖がある。(3行め, machi-michi-muchi, 4行め, yagi-mimi-mori。)

こう見えてくると、歌詞に〈定型詩形式〉らしきものも見えはじめる。

- ・行末の母音だけで、強引に脚韻を連想するなら、最初の8行は a - - a a a a a となる。
- ・さらに各行の母音を母音を数えると、1, 2, 5, 6行は10個、3, 4, 7, 8行は13個とそろっている。5 - 8行が、1 - 4行と同じメロディーで歌われていることを考えると、母音数からして、aabb という〈形式〉の反復が見えて(聞こえて)くる。

この観察は、はたしてなにを〈意味〉するのだろうか。歌であれば、音楽的な言語音の分節化という要請にしたがって、語音列がある程度整えられるのは、当然といえば当然だろう。また、歴史的な経緯を考えれば、歌が、朗詠をともなっていたと考えられる定型詩と同じような言語の形式化を行なったとしても、これもまた当然だ。陽水の例に観察できるような形式をもった歌など、世の中にゴロゴロしている。

だがここで、陽水の「My House」も、こうした習慣ののっとなって作られたのだ、これを聴く者は、場合によってはその〈形式〉に気がついて、しかるべき〈スキーマ〉を発動させて、歌の形式を判定するのだ、で終わってしまっただけは、なんだか大マヌケではないか。現場で起きていることは、こんなマヌケな〈判断〉とは遠くへだたっている。「My House」を聴いている者は、あるいはこうした聴覚的に分節可能な部分をすべてとらえながら、あるいは

その一部だけをとらえながら、あるいはまったくとらえもしないで、しかも、それになんらかの〈判断〉をしようなどときっと思いもせず、さらにしかも、それをおもな目的にしようなんてまったく意図しないままに、聴いているのだ。

私がこの歌から〈析出〉した聴覚的な諸分節は、ふたつの意味で潜勢的である。まず、受容者が、少なくとも意識的には、この諸分節のすべてをとらえるわけではない点で。また、とらえられた分節が、それなりの記号化、つまりあるシニフィエ、ある種の〈意味〉や〈意義〉に書き換えられるかどうかは、個体差による、しかも同じ個人でも条件によって変化するという点で。この潜勢態を考慮して、私はこうした分節を、記号化の前の段階としてのアスペクトと名づけるのである。

今度は、ことばの、つまり意味が読み取れるレベルでキャッチできることを見てみよう。そのうち、ことばの形態面としてまとめられそうなことを最初に示してみよう。

- ・ 3 行め、「人並」ということばはなんだか変だ。「人並」は、ふつう、人がする当たり前のことと同じように、といった意味で使われるのに、どうやらここでは人の波、「人波」のことらしい。陽水はまちがったのか。それとも、歌詞カードの誤植か。その可能性は排除できない。

が、行頭の「街」と行末の「人並」から、「街並」という月並みなことばが連想できる。「人並」は「街並」からの派生的な造語か？

- ・ 4 行め、「盛り上げ製菓」は、森永製菓から生じたか？

最初の観察では、「街」⇒「街並」⇒「人並」というずらし込みが想定できる。「人並」がこのコンテキストでは違和感を与えうることから、文脈的に「人並」を理解しようとしても、まだなんだかよく「分からん」。むしろこれは、たんなる表記、つまりシニフィアンレベルでのずらし込みと考えられそうだ。「盛り上げ」は、まずは「山羊の耳に」「盛り上げ」という文脈的な意味形成として理解できそうだ。ただ、そうしたところでこの行の肝心の〈意味〉はよく「分からん」。そこに「製菓」までつけられたら、いよいよよく「分からん」。

だが、「盛り上げ」ということばの音的な特徴と、「製菓」ということばをつないでみると、「森永製菓」という語が連想されてくる。それでもなお、だからなんだというのだろうか？ この連想も、とりあえずはアスペクトのレベルに留まっていると言える。

しまいに、もっと〈意味〉に踏みこんだ観察をしてみよう。

- ・呈示された歌詞は、全体をとおしては「分からん」が、部分的には十分理解可能である。
- ・それなのに、やすやすとは理解できそうにもないメタファーが続出している。

恋⇄マッシュポテト

恋⇄電子キャラメル

電子⇄キャラメル

山羊の耳⇄盛り上げ製菓

盛り上げ⇄製菓

海を越えた⇄ムラサキ電話

ムラサキ⇄電話

俺の悲しみ⇄mamamamama ……

- ・3行めの「無知な」はどこにどうかかるのか。「街の道」を知らないのか、「街の道」のうえに、「無知」な人たちがいるのか、その両方なのか、それともどちらでもないのか。
- ・こうなると、わずかにはっきり分かんと言えそうなのは、わずかに単語のレベル、あとはせいぜい5行め「誰がミック・ジャガーだ」、6行め「どこがチャイナタウンだ」、8行め「古い事は明治らしいわ」、そして11-12行め「雪の白アリは 分からん」（たしかに「分かりにくい」）くらいではないか。それにしても、なんで「古い事」は「明治らしい」のか。
- ・たったこれだけであれ、分かるとしても、そこにどんな文脈を見つければいいのか？

けっきょく私には、この歌詞の全体は、「分からんム」。取り上げたシニフィ

アンたちのそれぞれは、私のなかで、それなりのぼんやりとしたイメージをかきたてる。しかし、それがどこかの「判断」に、シニフィエにたどり着いて安定することはない。私のなかで、この段階でも、分節たちは、アスペクトとシニフィアン／シニフィエとの間で、不安定に振動し続けているだけだ。

ハードロックのビートに乗って、あいつやつやした美声で陽水が歌う「My House」を聴くと、私はなんだか、「ばかやろ、どーでもいいじゃん、俺はしんどいんだよ、みんなバカみたいなことにこだわるから、おかげでおれはしんどくてしかたがないんだよ！」というような、しかしあくまでも〈このような〉気分にはたってしまう。どうしてだ？ 語音の〈形式感〉は、聴覚の快楽に、単語の選択は、ある種の感情性の生産に、そして文脈の理解のしがたさは、たとえば〈他人は私を理解してくれない⇒言語伝達なんてしゃらくさい〉という感情の象徴的表現、と、それぞれにテキトウに結論してしまっ

て、あなたは満足か？

断じてちがう。分節たちは、それぞれ、アスペクトとシニフィアン／シニフィエとの間で振動し続けている。また、分節たちは、その各々が、あるいはアスペクトのまま、あるいはシニフィエへの書き換えを求めながら、せわしなく相互に、またせわしなく私の意識／無意識の貯蔵庫と、また何度も何度も感覚内容と参照しあう。そのなかで、あるアスペクトは消え去ったり(脱落)もする。この運動態が、まずは少なくとも私の心のなかで起きている、そしてなんとか私に意識化できる、「My House」を聴いている現場なのである。感情的／知的な判断は、この現場ではあくまでもオブションである。私はそこまでたどり着かない。そして、たどり着かないにもかかわらず、私の感情は、運動態と併走して、不安定に運動し続けている。ほかの受容ケースでも、汎用モデルとともに考えられるこのプロセスは同じであると考えてよい。ただ、受容者がことなる場合には、意識がとらえうるアスペクトは、その分節のしかたも、その数もことになっており、その生産に関与していると思われる無意識が私とは別のものであり、また、そのせいで、さらに意識のレベルでの注意の差に応じて、末梢系の知覚が変化しており、意識による受容のプロセスが、どこで終了するかがことになっているわけである。

仮説モデルから導き出されたこうした観察は、当然各個体の受容過程に関するデータ集積的な研究を要求するものである。ここで私は、なにが観察のポイントになるのかを、アスペクトの形成というモデルにしたがって十分に示したと思う。

つぎに例示したいのはいわゆる「おやじギャグ」につらなるケースである。

「ふとんがふっ飛んだ。」「恋よ来い。」「人間って、ぞんざいな存在だね。」「手稲っていいね。」「真駒内まあ混まない。」引用している私でも、腰がくたけてしまいそうだが、これまた言語記号のアスペクト性（音的な類似）に重点をおいて、付随的になんとか意味のあるテキストを形成している例だ。「おやじギャグ」は、おやじである私にとってもじゅうぶんおやじ臭いし、くウケることはない。ただ、これでウケる人にとっては、その人には笑いという突発的な情動が働いていること、ウケない人の場合、このテキストそのもののアスペクト性や発話内容そのものよりも、ウケない原因が発話者に向かうケースが圧倒的に多いことは、注意を要する。おやじ臭いおやじが、「おやじギャグ」を発して、そのおやじを、おやじ性のゆえに毛嫌いする受容者は、発話者という参照事項も重要な分節（「おやじ」のスキーマと言っていい）のひとつとして参照する。ところが、ごく親しい友人が、しかも確信犯的に「おやじギャグ」を連発すると、受容者は笑いだすかも知れない。ここでは、「おやじギャグを連発するおやじ」というスキーマが発動して、笑いという情動につながる、と考えてよさそうである。だが、だからといって、それは笑いという情動そのものについては、なにも情報を与えてくれない。

芸能の世界では、「おやじギャグ」はりっぱな大切りの芸である。「となり」の家に、囲いができたってねえ。」「へえ。」ここでウケる人は、きっとおやじの「おやじギャグ」よりもっとずっと多いだろう。なぜなのか。

さらに、「おやじギャグ」とおなじ、音的アスペクトの重視という手法が、笑いも敵意もさそわず、むしろある受容者には〈かつこいい〉と受けいれられている場合がある。Dragon Ash の Summer Tribe の一部を引用しよう。

屋下がりの外は炎天下／バッコリ盛り上げてい^くぜ^え宣伝 car

.....

街に到来だ夏真っ盛り／マジに膨大な Heads 増すばかり

.....

超 High な状態で Show time／後は好きに騒いでちょうだい

.....

活気あふれた大通り／誰もが我を忘れて踊り

.....

やっぱコンクリートの熱帯雨林／閉め切った部屋なんて絶対無理

Show も佳境に Party beat／俄然今日も過剰に Body need

まだ奥の V. I. P じゃギャルと Chill／知った顔が飲み干すラムとキー
ル

こんな感じで日々経過／焼ける暑さもやがて不意に低下

次第に赤や黄色で街が染まり／もうすぐ短い夏の終わり³⁹⁾

お分かりのように、各行「おやじギャグ」の連発である。ところがこれは、Dragon Ash を好んで聴く人、また、そうではなくともポップスをよく聴く人、あるいは、ポップスとはまったく縁がない人ですら、「おやじギャグ」とはとらえない。それどころか、ある人にとっては、これは「くっかいいい、ノリノリだ、クール！」という感情をひき起こす。この時点ではっきりと言えること。分節のアスペクトは、たとえそれが同一と判定できたり、同じような仕掛けで成り立っていると判定できても、さらにはそのアスペクトがシニフィアン／シニフィエへの書き換えという知的判断をともなっていたとしても、その判定とはまったく関係ない受容が可能だということ。汎用モデルから容易に推察できる受容の多様性は、じつは目もくらむばかりの広がりをもっている。

Dragon Ash の例をもう少し詳しく考えてみよう。じつはこの「おやじギャグ」的な仕掛けは、「おやじギャグ」とはちがう故郷をもっている。言わずと知れた、アメリカの rap music、あるいは hiphop がそれだ。そこでは、ビート感が重視されて脚韻が多用される。脚韻という形式をもち合わせていない

日本では、脚韻は（陽水でもそうだったように）不完全なかたちとなって、いわば「おやじギャグ」のような外観を呈してしまうというわけだ。この故郷から、Dragon Ash の〈かっこよさ〉の一部が垣間見えてくる。

「おやじギャグ」でも述べたことだが、Dragon Ash を受容している際には、じつは Dragon Ash というグループ、その活動、ビデオクリップやライブやテレビやラジオでの出演などからうかがい知れる彼らのルックスや人物性、声、演奏、日本のポップシーン、アメリカのポップシーンといった、この曲以外のありとあらゆる情報との参照が起きているのである。こうしたことすべてが、アспектとしてからんでくる。テキストの受容の現場では、言語だけが観察の対象ではないのだ。しかも、受容者が発動させている言語以外のアспектは、汎用モデルの仮説にしたがって、じつに末梢系、無意識、意識のすべてのレベルを巻きこんだ、複合的で重層的な運動態、しかもその運動のどの部分も、場合によってはすべてを中断できるという、まことに中途半端な運動態を形成しているのである。これをひとつひとつ、観察対象となりうる部分を慎重に切り出して、データの信頼できる仮説モデルの検証作業を行わなくてははいけない。

V. おわりに

文学の受容を考察するはずの私が、ちっとも〈文学〉の例を持ってこなかったんじゃないかと批難されそうだが、私には、テーブルの上のところがついているメモも、雑誌の見出しも、広告のキャッチコピーも、「おやじギャグ」も、ポップスも、ラブレターのなかのこちらが気恥ずかしくなりそうな詩も、コンピュータソフトの使用説明も、法律の条文も、いかつい論文も、カフカの〈不朽の名作〉も、要するにそこにことばがあるかぎり、りっぱな考察の対象だ。文学の研究を少しでも有効で有用なものにするためには、まずもって、研究者自身が持っていると思われる〈文学のスキーマ〉、それ自体が私の示している物体／事柄の受容に関する汎用モデル 2 の行なう作業の結果にすぎない、したがってすさまじい個人差をふくんだ、いわば先入見にすぎないスキーマ

をできるだけ発動させないようにしなくてはならない。

Dragon Ash には不完全ではあるが脚韻がある、と私は言った。脚韻は詩に大量に現れる。詩における脚韻、あるいは詩にかぎらず広くテキスト全般を受容する際に顕在化しう言語の聴覚的なアスペクト性、視覚的なアスペクト性、シニフィアンのずれ込みとしてのアスペクト性、〈文体論〉がとらえそこなうアスペクト性、といった事態を、しっかりととらえなくてはならないし、それは可能なはずである。

最後になるが、文学研究のモデル構築に関する考察において、私に大きな示唆を与えてくださった石澤氏のように、モデルが示すような受容の不安定性、また無意識の関与による不透明性からして、「在りそこないとしての人間」といった具合になにも悲観的にとらえる必然性は、私はないと考える。不安定性、不透明性は、文学の受容をあるほんやりとした方向に限定してしまう可能性をふくんではいる。しかしこの限定の可能性は、その動因の一部であっても、意識に持ちこむ努力を続けることで、修正していけるものと私は思う。また、そもそもこの不安定性、不透明性は、物体／事柄の受容におけるすさまじい数にのぼる個体差、そればかりか、同じ個人でも時間の経過とともに現れてくる差として、受容のめくるめくような豊かさの源ともなっているのだ。

また、氏のように、あるいは広く芸術と呼ばれる分野に関わる研究者にまま見うけられるように、考察の補助として〈美〉という特殊なシニフィアン／シニフィエを持ちこむこと⁴⁰⁾には、私は断固として反対する。〈美〉というシニフィアン／シニフィエは、考察のきっかけではなく、考察の、しかもおそらくはかつての歴史的な考察、真・善・美という先入見にみちていた時代の考察の結果にすぎない。この先入見を、そのシニフィエはもちろん、そのシニフィアンでさえ、思考を分節する装置として、文学にかぎらず一般の受容の現場に持ちこむことは、すでにそれだけで誤りである。

このふたつの批判は、私の意識にかぎりない刺激を与え続けてくださる石澤氏への感謝の気持ちの表明として、この小論の最後にそえておきたい。

注

- 1) 八木重吉：定本八木重吉詩集。彌生書房 1975. p.47. 初出は 1925.
- 2) Miller, J.-Hillis: The Ethics of Reading. Columbia University Press, 1987. を参照.
- 3) Solso, Robert L.: Cognition and the Visual Arts. MIT Press 1994. [邦訳] ロバート・L・ソルソ：脳は絵をどのように理解するか。新曜社 1997. なお、引用は邦訳による.
- 4) ソルソ：同掲書 p.51.
- 5) 同掲書 pp.117-118.
- 6) 同掲書 p.122.
- 7) 同掲書 pp.219-265.
- 8) 同掲書 p.142.
- 9) 同掲書 pp.142-143.
- 10) 同掲書特に pp.271-274, 283-288.
- 11) 同掲書 p.274.
- 12) 同掲書 pp.297-298.
- 13) 絵画の認知をテーマとしたソルソの考察を検討する範囲では、聴覚に関してふれることができないが、視覚による知覚と同様の手続きを踏めば、聴覚に関するモデルも容易に構築できるだろう。言語知覚に関する聴覚的な要因については、のちにふれる.
- 14) 石澤誠一：翻訳としての人間。フロイト＝ラカン精神分析の視座。平凡社 1996.
- 15) Freud, Sigmund: Entwurf einer Psychologie. Aus den Anfängen der Psychoanalyse. Briefe an Wilhelm Fliess. Abhandlungen und Notizen aus den Jahren 1887-1902. Fischer 1975. S.151.
- 16) Freud, Sigmund: Zur Auffassung der Aphasien. Eine kritische Studie. Franz Deuticke 1891. (邦訳) 金関猛訳：失語論。批判的研究。平凡社 1995. (解説は石澤誠一氏)
- 17) 石澤誠一：同掲書 pp.84-126.
- 18) 同掲書 pp.110-111.
- 19) 同掲書 p.116.
- 20) 同掲書 p.102 を参照.
- 21) Freud, Sigmund: Das Unbewußte. Studienausgabe Bd. III. Fischer 1975. S. 160.
- 22) 石澤誠一：同掲書 p.124.
- 23) Freud, Sigmund: Entwurf einer Psychologie. S. 339.
- 24) 石澤誠一：同掲書 p.125.

- 25) 同掲書 p.95.
- 26) Freud, Sigmund: Entwurf einer Psychologie. S. 151.
- 27) 石澤誠一：同掲書 pp.100－101.
- 28) 同掲書 p.111, p.108, p.101, etc.
- 29) 丸山圭三郎：ソシュールを読む。岩波書店 1983.
- 30) Notes inédites de F. de Saussure. In: Cahiers Ferdinand de Saussure 12. Droz. 1954. p.59.
- 31) Saussure, Ferdinand de: Cours de linguistique générale. Edition Critique Par Rudolf Engler. Tom 1. Otto Harrassowitz 1968. p.253 (1830 R).
- 32) Saussure, Ferdinand de: ibid. p.253 (1830 R).
- 33) 石澤誠一：同掲書 pp.128－9.
- 34) Saussure, Ferdinand de: ibid. p.266 (N. 10).
- 35) 石澤誠一：同掲書 pp.130－131.
- 36) Damasio, A. R.: Descartes' Error: Emotion, Reason, and the Human Brain. New York 1994. (邦訳) アントニオ・R・ダマシオ：生存する脳—心と脳と身体の神秘。講談社 2000.
- 37) 石澤誠一：同掲書 p.127.
- 38) 石原次郎：アスペクト論素描。北海道大学文学部紀要 45－2. pp.177－195. 1997.
- 39) 山本祥子に感謝。
- 40) 石澤誠一：同掲書 p.475.